



## 英語

# — 情熱とアイデンティティー —

別所 哲也 Bessho Tetsuya

英語との出会いは小学校時代。ある日、自宅で一本のカセットテープを見つけた。叔父が忘れて行った英検受験用のテープだった。宝物を見つけた気分になり、カセットレコーダーから英語が流れてきた瞬間に感じた不思議な感覚は今でも覚えている。

自分とは違う言葉を使っている国がある、海外に行ってみたい！憧れは膨らみ、「留学をしたい。」と両親に伝えた。すると「その夢は自分の力で叶えなさい！」との返事。当時はどうして支援してくれないんだ！と納得がいかなかったが、今にして思えば、この時「いつか絶対に英語をしっかり勉強してアメリカに行ってみよう！」と心に決めたように思う。夢の実現は、どんな困難の前でもそのモチベーションが色あせないことが重要だ。応援支援することと、一人一人のココロの中にやる気・情熱の光を灯してあげることは別物。夢や目標に向かうのは、その人自身の中にある情熱の光。その光を絶やさないと。周りはそれをどうサポートできるか、なのだ。

慶應義塾大学に入り、芝居を通して英語に触れる英語劇サークルに入部を決めた。英語への情熱が演劇に化学反応していった。大学3年の時、俳優を志すことに決めた。英語は道具、その向こう側にある「何か」に情熱が持てなければ持続しない。当時、日米合作映画のオーディションがあり参加。何度も行われるオーディションを通過しハリウッド映画「クライシス 2050」に出演決定。念願の初海外が仕事での渡米となったのだ。憧れのハリウッド、ロサンゼルスでの生活。しかし夢のような生活は、早々に行き詰った。英語はかなりの鍛錬を積んできたつもりだったが、耳がロックしてしまう。現地の出演者・スタッフの話すネイティブイングリッシュが全く理解できない。撮影だけは台本を頼りになん

とか付いていけたが、それ以外のコミュニケーションを取る事が減っていく。日本人スタッフがほとんどいない環境もあいまって、とてつもない孤独の中で感じた「自分は何者か？ そうだ“日本人”だ。」という思い。そして「英語はセカンドランゲージ。完璧を目指すのは辞めよう。失敗したっていいじゃないか！」と開き直った。するとどんどん英語がわかるようになった。耳のロックは、心のロックだったのだ。それはまさしく日本人としてのアイデンティティーに悩み、そのアイデンティティーに救われた瞬間だった。アイデンティティー・クライシスに向き合う時間が、英語という母語ではない言葉と向き合う時間でもあった。帰国後は、英語を話せる事で様々な国の人たちと交流する事ができ、ライフワークとしている国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル」を15年続けられている。

初めて本格的に英語に触れる子供たちにとって、その出会いが好奇心と驚きに満ちたものであり、英語の向こう側に「情熱を持てる何か」と出会えたと願う。先生方にはその情熱を共有し、海外の価値観や文化と出会うことで自分自身のアイデンティティーと向き合う時間を生徒たちと分かち合ってもらいたい。結局のところ言葉も文化もそこにいるヒトとどう向き合うかだ。英語という言葉は、扉の向こうに入っていくための“鍵”なのだ。鍵の先にある情熱の泉を目指してほしい。それこそが語学習得のショートカットに他ならない。

### べっしょ てつや

静岡県出身。慶應義塾大学卒業。90年、映画「クライシス 2050」でハリウッドデビュー後、映画・ドラマ・舞台・ラジオなどで幅広く活躍。99年より、日本発の国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル」を主宰。6月13日より、天王洲・銀河劇場にて、ミュージカル「カルメン」に出演予定。